

コロナ流行、下水で予測 札幌市が週1回、調査結果を公表 ウイルスRNA計測

2022年8月30日 火曜日 北海道新聞



札幌市は、新型コロナウイルスを下水から検出できる仕組みを利用した疫学調査「下水サーベイランス」の結果の定期的な公表を始めた。毎週金曜日に市ホームページで公開する。検査を受けていない無症状者を含め感染の流行を把握できるのが特徴で、26日には直近の1週間(16～22日)の結果を含め今年1月からの推移を公表した。市は検証を進め、感染対策への活用法を探る。

感染者は症状の有無にかかわらず、ふん便や唾液にウイルスRNA(リボ核酸)を排出する。このため、下水のRNA濃度(1リットル当たりのウイルス遺伝子数、単位はコピー)を調べれば、医療機関での受診数や検査数に影響を受けることなく、市中の感染状況を把握できる。

内閣官房は本年度、実証事業として道内外の自治体で行っており、道内は札幌市のみ。

感染第7波でのRNA濃度は8月9～15日の5万300コピーと過去2番目に高かったが、直近の調査の16～22日は2万4400コピーと前週比で5割下がった。

同期間の1週間分の感染者数は9～15日で1万7745人、16～22日は1万9757人に増えた。一方、23～29日は1万4820人で前週比25%減だった。

市は昨年2月から、北大の北島正章准教授の協力を得て調査を行っている。市人口の5割強をカバーする創成川、豊平川、新川の下水処理場「水再生プラザ」の計3カ所で週3回、下水を採取している。

市下水道河川局によると、感染者は発症前から下水中にウイルスを排出するため、疫学調査で感染動向を予測できる可能性があるという。同課は「感染状況を示す一つの指標として市民の関心を高めたい。検証を進め、市のより効果的な感染対策にもつなげたい」と話す。(五十嵐俊介)

